

釜山日本人学校における国際理解教育・現地理解教育の深化を求めて

前釜山日本人学校 校長

神奈川県横浜市立青木小学校 校長 田上 恭孝

キーワード：在外教育施設, 釜山, 国際理解教育・現地理解教育, 学校経営

1. はじめに



釜山日本人学校校舎全景

「近くて遠い国」とも表現されたこともある韓国に派遣された3年間を海外子女教育の充実と言う観点から過ごしてきた。この思いに駆られたのは、学校正門玄関に表示された校名札が数年前までは、小さな家庭用表札であったとのこと。理由は極力目立たないことが良しとされる社会風潮の中にあつたことと見聞したことからである。

釜山日本人学校のある韓国第二の都市である「釜山広域市」は人口は約370万人、地理的には日本との近接（50km先は長崎県対馬）

で日韓両国の歴史においては人的交流や関わりが濃密な地であることから、今後の日韓関係を考える時に、未来的指向の人材育成の観点に立って、在外の地にある学校教育の充実を捉える必要があると考え、全教職員共々英知を傾け取り組んできた次第である。

2. 在外教育施設の現況等

1974年に補習校として設立、その翌年1975年10月1日に「釜山日本人学校」として創立以来35年の歳月を重ね、その時々を経済状況等により児童・生徒の構成は変化してきた。

近年は国際結婚家庭の子女が増えてきつつあり、全校児童生徒における割合は4割の状況となっている。児童・生徒数の推移は、1990年度の58名をピークとして減少傾向であったが、2003年度31名を底として近年は現状維持ないし微増傾向である。これは先に述べた国際結婚家庭子女が増加していることに加えて、近年、釜山近郊の昌原や亀尾地区に日系企業が徐々にではあるが韓国企業とのJVとして進出していることも要因と考えられる。

3. 管理運営上の課題と教育指導の創意工夫について

3年間の本校における学校経営において、学校経営に関わる徹底したコスト意識と特色ある教育活動の創造をテーマとして臨み実践してきた。創立から35年を経過し校舎の老朽化が著しい中、本校経営における収入源としては、保護者からの学校運営費（授業料）と釜山日本人会及び政府補助金より成り立っている。

2008年度までの政府補助金（外務本省関連予算）が、政府財政の厳しさより2009年度より大幅に減額されることになった。外国語講師謝金補助金にあつては、1名雇用のしかも6割カット。警備費関連補助金にあつては、全額カットの厳しさであった。釜山日本人会会員企業数も大幅増加の展望はなく現状維持ないし微減等が続き、釜山日本人会よりの補助金増額は望むべくもない状況であった。

ここにおいてPTAを中心として保護者からの嘆願書を外務本省に送付し、一定程度の補助金復活にはつなげたものの全額復活にはほど遠いものであった。教職員には以前よりさらにコスト意識を持って教育活動を実践するよう指導し、また小職自身率先垂範の姿勢で活動してきた。予算費目を見直し、10%シーリングをかけてコスト削減に努める中、2009年度学校運営を切り抜けてきた次第である。

2010年度にいたっては、保護者に4年ぶりの学校運営費改訂の願いをし、50,000Wの値上げを実施し運営してきた。結果、約20,000,000W余の黒字決算の見通しとなった。また備品費用の節約の観点から、ソウル日本人学校の移転開設に伴い、同校の児童机・椅子及び冷房機器等を譲渡してもらった。これも常日頃からのソウル日本人会と釜山日本人会及び両校学校運営委員会の理解と協力によるものと感謝している次第である。教職員にあっては数回のソウル日本人学校への備品調査、現地調整を経て、備品等搬出・搬入当日は、休日にも関わらず、2日間にわたり備品の搬出・搬入に全員で携わり、積極的に関わってもらった。

なお夏季休業中の校舎のペンキ塗り作業は、職員作業として恒例になっている。このような厳しい財政状況の中でも、重点化すべき教育活動として、「日韓親善の現地における最先端にある釜山日本人学校」にあっては、未来に向けての人材育成の観点に立って「特色ある教育活動として」次のような活動を採り入れ実践してきた。

○ねらい…日韓親善の芽を育むとの意識をしておける特色ある教育活動

① 韓国伝統音楽鑑賞教室

2008年に設立された国立釜山国楽院の全面的な協力の下、韓国伝統舞踊と音楽鑑賞の日程を設定した。その中でプロ演奏家によるチャング（太鼓）演奏体験指導や、リハーサル室見学での舞踊見学、ステージ見学等の日頃は体験することのできない貴重な五感を通じた体験活動の一日となった。最後は1時間半に及ぶソルチャングやナントなど伝統舞踊をたっぷり鑑賞し有意義な活動となった。



国楽院でのチャング演奏体験教室

この体験教室を実施するに当たっては、国楽院関係者との信頼感の醸成を時間をかけて行い、当方の「日韓親善にける教育としての思い」を理解していただいた結果と捉えている。

② 木浦共生園との交流事業

2008年度中学部が「総合学習～韓日両国を紡ぐ人々」として全羅南道・木浦市内にある児童養護施設「共生園」の創設者である故田内千鶴子氏について取りあげた。キリスト教伝道師伊致浩氏の活動に共鳴し、やがて夫婦となった田内千鶴子氏は「韓国孤児の母」と慕われ1995年には「愛の黙示録」として映画化された人物である。田内千鶴子氏の業績を調べた学習をさらに深化、発展させるねらいから、施設との交流を実践することになり、中学部による学習発表等の機会を通して全児童・生徒にも活動を広げる中から、2009年度は共生園への文房具寄付活動を実践した。

これをさらに学習発展させる意図をもって、2010年度の中学部による共生園への福祉体験活動へと活動範囲を広げていき、大きな成果をあげることができた。

③ 韓日作文大会への初参加

2001年東京・JR山手線新大久保駅において日本人カメラマン関根史郎氏とともに、ホームから線路に転落した人を救助しようとして亡くなった李秀賢氏の遺業を受け継ごうと行われていた作文大会に、韓日文化交流協会の支援により、本校児童・生徒が初参加した。この大会参加にあたっては、釜山市出身である李秀賢氏の行った業績と遺徳を授業を通して「生命の大切さ」とともに考え調べさせた。大会当日はご両親とも親しく接する中でより親近感を増す存在としてとらえることができた。

本校に在籍する児童・生徒にとって、今後の日韓関係を考えていく時に、「民主主義」「基本的人権の尊重」を共有の価値観とする隣国同士として、人材育成の視点から大きな成果が望まれる参加となった。

④ 創立35周年記念イヤーとしての活動実践・「お誕生集会」

本校創立時における先人の労苦を思い、これから未来に向かっての羽ばたきにするとの決意を込め、2010年度一年間の教育活動を節目の年度として「歴史に刻め見事な(35)なこの一年」(児童・生徒のコンペディションにより決定)をスローガンに多彩な教育活動を展開してきた。

具体的には運動会における特別記念種目の設定や諸教育活動における周年行事活動があげられる。集大成として、12月2日「お誕生集会」を開催し、来賓多数を招待する中、一部の儀式的行事に引き続き、二部では児童・生徒の創意工夫したプレゼンテーションにより、大いに盛り上がり狙いを達成することができた。

4. まとめ

経営テーマに対する課題克服も十分とはいえないものの、在釜山日本国総領事館や釜山日本人会及び学校運営委員会、韓日親善協会等関係各位の多大なるご支援・ご理解があつてこそ、なし得たものと感謝する次第である。

現地理解教育・国際理解教育の観点からとらえて現地校及びインター校等との交流は、先人の努力により在外の地にいるからこそその特色ある交流が続けられ、それなりの成果が上がっている。創立時の現地理解教育・国際理解教育は、その地にいるからこそ人的交流が中心になるのだが、創立より35年という円熟期と考えられる時間の経過を考え、前例踏襲的な単なる学校行事としての人的交流面からとしてではなく、未来に向かう日韓関係を支える人材育成の観点からとらえて、さらに発展・深化させるという意味合いから人的交流や文化・生活面理解の視野も取り入れた教育活動を実践してきた。この日韓両国を紡ぐ人材の育成との視点は、これを契機として将来の世界ベースで見る視点へのとらえとなるべく期待しているところである。

日本人学校の存在意義が「日本理解のための日本人学校」としての役割をも求められる中、釜山日本人学校で実践してきた教育活動の意義を強く感じたところである。3年間、釜山日本人学校で全教職員と力を合わせ「海外子女教育の充実」を常に念頭において、勤務した経験は小職にとってとても貴重な種となり糧となった。

これを今後、国内において「近くて近い国として大いに意識している日韓両国の親善」のために十二分に活かすように積極的に活動していきたい。

このような機会をいただいた文部科学省を始め横浜市教育委員会、関係各位に厚くお礼を申しあげる次第です。